

9月2日 年間第22主日

シラ 3:17～29 ヘブ 12:18～24 ルカ 14:1,7～14

1. シラ

シラ書は、紀元前2世紀初め頃のエルサレム上流階級の生活と思想を描いている書物で、きわめて多岐にわたって世俗的かつ実際的な“教訓と知恵”(1:12)を教えています。私たち現代人は、ともするとその結論である“知恵”だけに目を向けますが、ユダヤ人にとっては“すべての知恵は、主から来る”(1:1)“主を畏れることは、知恵の初めである”(1:14)ということ、したがって「主はへりくだる人によってあがめられる」(v.20)という知恵理解こそが大切でした。

処世術ないし道徳としての“知恵”を、優れたキリスト教的西欧文化として広めたのは、近代のいわゆる外国伝道でありました。そこでは“柔和”や“へりくだり”は美德であって、そのような知恵によって生活する人を「主は喜んで受け入れてくださる」(v.18)と教えられて来ました。しかしそこでは相対的に、キリストの福音を通して示された“神の知恵”(Iコリ1:30)や“霊の知恵”(エフェ1:17)が軽視されたというのが事実です。

私たちはもう一度、使徒パウロの言葉に注目しましょう。「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」(Iコリ1:21)

2. ルカ

v.11 「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

この譬え話では、高ぶるとは“自分には人々から重んじられる特権がある”とすることです。そういう人は、他人が自分に上席を提供したり、しかるべき返礼をするのは、当然のことだと考えます。世俗の知恵とキリストの福音を通して示された神の知恵の違いが分からないので、自分は神の前でも“正しい人間として重んじられる特権がある”と、誤解してしまいます。

現代の教会でも、洗礼の秘跡を受けてキリスト者になることと、処世術ないし道徳としてのキリスト教的知恵を学んで生活することを同一視する傾向が、かなり一般的のようです。カトリック教会の信者であるということで、自分は救われた人間であると安心していることが、信仰生活なのだとか多くの人が考えています。

しかし、今朝の福音書のテキストは、“宴会を催すときには、お返しができないような貧者や弱者を招きなさい”という美德を教える、実践的教科書のようなものではないのです。そうではなくて、これはキリストの福音を人々が理解するための、使徒たちの宣教の一環として語られました。

“へりくだる”とは、何よりも先ずキリストの御業のことでありました。キリストは神でありながら、人間と同じ者になり(受肉)、十字架の死に至るまでへりくだって贖いの業を成し遂げてくださいました(フィリ2:6-

11、ヘブ 5:7-10)。人はこのキリストの贖いの業を信じる信仰によって、無償で義とされるのであり(ロマ 3:23-25)、ただ恵みにより、信仰によって救われた(エフェ 2:8)私たちからは、誇りが取り除かれました(ロマ 3:27)。これがキリスト者の“へりくだり”なのだということを、福音書は訴えているのです。

まず、キリストの“へりくだり”があって、その受肉と十字架の贖いの業を信じて“恵みに対してへりくだる”キリスト者が、復活の日に報われると、使徒たちは宣教しました。

3. ヘブ

私たちキリスト者は、洗礼の秘跡によってキリストに結ばれ(ロマ 6:3)、神の国を受け継ぐ民とされました(エフェ 3:6)。このことを使徒たちは“秘められた計画”と呼んでいます(エフェ 1:9、3:3、コロ 1:26、ロマ 16:25)。ですから私たちは、信じる者を終わりの日に復活させるキリストが(ヨハ 6:40,54)、救い主として再臨されるのを待っているのです(フィリ 3:20、ヘブ 9:28)。

この“神の国の報い”から切り離された“知恵”は、ただの処世術ないし道徳としての“この世の知恵”であって、キリストの福音を通して示された“神の知恵”ではありません。

“シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム……”、それは神が私たちのために用意しておられる神の国のことです。それは“その衣を小羊の血で洗って白くした”(黙 7:14)人々が受け継ぐ天の故郷です。そこでこそ最終的に、「(キリストの恵みに対して)だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」という福音書の言葉が“事実”となるということを、私たちは今朝聞かされているのです。

ハレルヤ、アーメン。

9月9日 年間第23主日

知 9:13~18 フィレ 9~17 ルカ 14:25~33

1. ルカ

v.26 「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではあり得ない。」

v.27 「自分の十字架を背負ってついてくる者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではあり得ない。」

この二つの句は、初代教会の信仰にとって、特にかなり大きな影響を及ぼしたイエスの言葉であったと考えられます。それで、いろんな異なる伝承の中で、この二つの句が引用されました。先ず、マタイ福音書では 10:34-39 という全く別な前後関係の中に置かれていますし、v.26 は同じルカ福音書の中でも 18:24-30 という別の物語りの中で、再び語られています。v.27 は ルカ 9:21-27 で語られているものの方が、他の共観福音書と共通する形です。

イエス・キリストに従う信仰とは、犠牲を伴うものなのだとすることを、初代教会は理解せねばなりません。実際、最初の信者たちは、しばしば反対者からの迫害や攻撃にさらされていました。使徒パウロはその手紙の中で、「あなたがたは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」と言っています(フィリ 1:29)。ですから信仰に生きるとは、“先ず腰をすえて計算する”(v.28) “先ず腰をすえて考える”(v.31) 覚悟を必要とすることでありました。

しかし私たちは、その犠牲という言葉や、迫害などの苦難を耐えることだけに限定して理解してはなりません。むしろ福音書の伝承は、これを“個人の主体的な信仰の決断”を迫るイエスの呼びかけとして、伝えているのです。人がどれだけ多くの犠牲を払ったかではなくて、どれだけ自分自身の救いを真剣に求めて決断したかが、問われているのです。

20世紀の教会は、キリスト教的な文化に賛同した改宗者たちの仲良し集団的な性格が強く、その宣教活動もキリスト教的文化圏の拡張のように考えられていました。家族や社会や国家の幸福と繁栄のために、優れた宗教であるキリスト教とその文化を宣伝することが、私たちキリスト者に課せられた使命であると理解されたのです。しかし福音書は、“私たち個人の主体的な信仰の決断”を迫るイエスの呼びかけをここで訴えていることに、21世紀の教会は気づかなければなりません。

2. フィレ

コロサイの富裕な信者フィレモンのもとから逃走して、ローマで使徒パウロに出会って信仰に入った奴隷オネシモのために、この手紙が書かれることになった経緯は、コロ 4:7-9 から明らかです。宛先はフィレモンと多分その妻アフィア、奉仕者アルキポ、そしてフィレモンの家の教会でした。

教会とは、この“個人の主体的な信仰の決断”によってキリストに従う者となった人々の共同体であり、

共に神の国を相続する一つの群なのですから、信者は各自に主が与えてくださった救いの恵みのゆえに、お互いを愛する兄弟姉妹として尊敬し重んじるのです。その場合いささかも、自分が他の信者のためにどれくらい犠牲を払ったかが功績として評価されてはなりません。使徒パウロは、「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」と言いました(1コリ9:23、v.19 参照)。ですから、この奴隷オネシモのための執り成しの手紙も、「むしろ愛に訴えてお願いします」(v.9)というものでありした。

第二バチカン公会議は、典礼の共同体性を強調して、すべての信者が充実した行動的な参加によって、ミサの共同体的祭儀としての性格に目覚めることを求めました(典礼憲章 11,14,26,27 参照)。司祭が共同体の名によって感謝の祈り(奉献文)をささげるところから、一同の聖体拝領が終わるまでは、神の国の相続人である共同体が目に見えるものとして姿を現すのですから、すべての信者は“立っている”ように指示されています(ローマ・ミサ典礼書の総則 20,21)。それは、“個人の主体的な信仰の決断”によってキリストに従う者となった人々が、お互いを愛する兄弟姉妹として尊敬し重んじる表現でもあるのです。

3. 知

v.17 「あなたが知恵をお与えにならなかったなら、天の高みから聖なる霊を遣わされなかったなら、だれが御旨を知ることが出来たでしょうか。」

かつて西欧のキリスト教は、その教えが世界に通用する“普遍的な知恵”であると考えていました。しかし今日、哲学者ハーバーマスはEU憲法制定をめぐる議論の中で、次のように述べています。「解釈を独占し、全面的に生活のあり方を指示することが出来るというこの自負を、宗教は、知が世俗化し、国家権力が中立化し、宗教の自由が一般化した(多元主義)中で放棄しなければならなかった。」(2004年のラッツィンガー枢機卿との討論会)* 「ポスト世俗化時代の哲学と宗教／岩波書店 2007 p.21」

キリストの福音における“知恵”が、何にも勝って“個人の主体的な信仰の決断”を迫るイエスの呼びかけであることに、現代のキリスト者は目覚めなければなりません。人がどれだけ自分自身の救いを真剣に求めて決断したか、ということが聖書を通して問われているのです。それは神からの問いかけなのです。

ハレルヤ、アーメン。

9月16日 年間第24主日

出 32:7～14 | テモ 1:12～17 | ルカ 15:1～32

1. ルカ

vv.1-2 「徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、“この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている”と不平を言いだした。」

これに答えてイエスが語られた三つの譬え話が、この福音書には集められています。最初の“見失った羊の譬え”は、マタイ福音書でも用いられていますが、ルカはこれを“選ばれた民としてのユダヤ人”と“見失われていた民である異邦人”という対比に当てはめて語りました。

二人の兄弟のうち、兄は悔い改めることを知らないユダヤ人のことを指しており、v.15で弟は最も汚れた人生を送っている異邦人を暗示しています。異邦人はかつて見失われていた民でありましたが、“悔い改めて”イエス・キリストを信じました。キリスト教会の歴史は、異邦人キリスト者の歴史であると言っても過言ではありません。しかし決して悔い改めは人間の功績ではなくて、神の恵みであり、神の側から見つけ出し受け入れてくださった結果であることを、この三つの譬え話は強調しています。

私たちが知っている歴史において、ユダヤ人は世界中で憎しみと迫害の対象とされて来ました。カトリック教会も、かつて第三帝国のヒトラーによるユダヤ人虐殺を、当時の教皇が黙認したという負い目から逃れることは出来ないでしょう。今日多くの人々によって反ユダヤ主義の歴史が研究されていますが、残念ながらそこでも、新約聖書におけるユダヤ人の位置づけへの関心はかなり低いのが実状です。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ」という父親の言葉(v.31)の意味を、私たちはもう一度考える必要があります。

キリストの福音は先ずユダヤ人に向けられたものでした(マタ 10:5-7、使 13:46、ロマ 9:4-5)。福音によって明らかにされた“秘められた計画”は、本来ユダヤ人への約束であった神の国を、“異邦人も福音によってキリスト・イエスにおいて、一緒に受け継ぐ者となる”というものなのです(エフェ 3:6)。ユダヤ人への神の賜物と招きとは、今も決して取り消されてはいません(ロマ 11:25-29)。

2. テモ

放蕩息子が父のもとに立ち帰ったことによって、彼は再び父の息子として受け入れられました。しかし、それは彼の過去の罪が消えたものではありませんでした。彼は父を裏切った罪を赦されたという事実を、生涯感謝のうちに負って歩むことになったのです。

v.15 「“キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた”という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。」

使徒パウロは、「わたしは、その罪人の中で最たる者です」という言葉を、彼がキリストの福音を宣教するときには、いつも語らずにはいらませんでした。

9月23日 年間第25主日

アモ 8:4~7 | テモ 2:1~8 | ルカ 16:1~13

1. ルカ

この譬え話の解釈については、異論が多くてなかなか満足できる結論がないのですが、ルカ福音書における前後関係から判断して次のように読むことができます。先ず v.1 の言葉は、この譬え話が 15 章のイエスの話の続きであることを示しているように見えます。そしてファリサイ派の人々や律法学者を、ここでは神の民の管理人に譬えています。彼らは 15:25 以下では父の寛容に対して不満を述べる兄として、16:14 では金に執着する人々として描かれています。そうだとすると、イエスは弟子たちにファリサイ派の人々のことを話されたのであって、v.9 は神の民の管理人としてのファリサイ派の人々を指している訳です。

この管理人は、主人の富を不正に使用してでも、自分の将来の幸いを手に入れようとしていました。彼はいわば神の恵みの富を、神の民に不正に横流しする管理人になったことを、イエスはこの譬え話の中で誉めました。イエス・キリストの福音の富を、人々に気前よく大盤振る舞いすることのほうが、知識の鍵を取り上げて“天の国を閉ざす”(マタ 23:13、ルカ 11:52)よりも良いのです。

v.13 「あなたがたは、神と富とに仕えることは出来ない。」

ですから私たちは、キリストの福音に仕えることを目的とするか、それ以外のものに人生の目的を置くかという二者択一を、ここで迫られていることとなります。事実使徒パウロも、いろいろ事情や動機が違って、「とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいきます」という考えを、ある場面で書きました(フィリ 1:18)。

2. アモ

アモスのこの預言が、終末的審判の到来という背景(8:2)の中で語られていることに注目しましょう。彼が単に商人の不正を糾弾するという社会問題に取り組んだと考えてはなりません。そうではなくて、イスラエルの民の心が富や利益の獲得に向けられるその反面で、“主の言葉を聞く”(8:11)ことが軽んじられ無視されていることを、神は見過ごしにすることが出来ず(8:2)、裁かれると預言したのでした。

今日教会が、キリストの福音を宣教することをその第一の使命として理解しているだろうか、と考えてみましょう。それは聖職位階にある人々だけの使命ではなくて、信徒にも等しく委ねられた務めです(教会憲章 34)。「このため信徒は啓示された真理をより深く理解するよう熱心に努力し、英知の賜物を絶えず神に祈り求めなければならない」と教えられています(同)。

しかし現実には、司祭はその説教で“使徒たちから伝えられた福音”を語ることなく、そこで育った信徒は福音を殆ど全く理解していません。ですから彼らにとって、教会の使命とは単にキリスト教的文化圏を拡張することに過ぎず、“罪の赦し、からだの復活、永遠のいのちを信じます”という信仰宣言の言葉がミ

サ以外の場所で本気で語られるなどということは、先ずありません。

アモスの預言は、そのような現代の教会を告発するために、今朝再び朗読されているのです。

3.1 テモ

vv.5-6 「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。これは定められた時になされた証しです。」

使徒たちは、キリストが十字架上で成し遂げてくださった御業を、“和解”の御業として理解しました(ロマ5:8-11、IIコリ5:18-21)。それは神の御業であって、神の永遠の愛に基づくものです(エフェ1:4-7)。それはナザレのイエスの多くの愛の業の一つというようなものではありません。そうではなくて神の子の受肉のまさに目的であり完成でありました。

キリストが仲介者であるとは、決してキリストが神とも人とも別な第三者であるという意味ではありません。そうではなくて、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」のであり(ヨハ3:16)、「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示された」ことを(ロマ5:8)述べているのです。

私たちキリスト者一人一人は、この福音に仕えることを第一の目的とするか、それともそれ以外のものに人生の目的を置くかという二者択一を、今朝の朗読配分を通して迫られていることに気づかねばなりません。なぜなら、キリストの福音は、人間のあらゆる混乱と不信仰にも関わらず、確かにミサの朗読配分を通して語られているからです。ですから、私たちは感謝しましょう。「“その声は全地に響き渡り、その言葉は世界の果てにまで及ぶ”のです」(ロマ10:18)から。

ハレルヤ、アーメン。

9月30日 年間第26主日

アモ 6:1,4～7 | テモ 6:11～16 ルカ 16:19～31

1. ルカ

ルカ福音書が独自のイエスの語録を保存している部分(9:51～18:14)には、かつてイエスがファリサイ派の人々や律法学者たちを非難された当時のことを想起させる数々の話が含まれています。しかし、この福音書が対象として想定している異邦人の読者にとっては、それらは既に過去の、それもローマによって滅ぼされて今は存在しないイスラエルの話でありました。それよりも、著者ルカが彼の時代に対して抱いた倫理的関心は、むしろ禁欲的・社会的なものであり、人道主義的色彩を帯びたものでありました。

そのため、この物語りは形式的には、“金持ちは富んでいることのゆえに陰府に落ち、乞食ラザロは現世で悲惨な生活を送ったことの報償として死後に慰めを得た”というものになっています。このパターンは「金持ちが神の国にはいるよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(18:25)という言葉にも表されていて、ルカは特にこの考えを強調しています(12:33, 14:33, 18:22 参照)。

しかし、天上のキリストが今朝の朗読配分を通して、私たちに向かって語っておられる最も重要なポイントが二つあります。その第一は、ラザロは死んだ後、天使たちによってアブラハムのすぐそばに連れて行かれたということです。それは“この人もアブラハムの子だった”(19:10 参照)ということなのです。私たち異邦人は、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて、“アブラハムの子”となりました(ガラ 3:26-29)。この、私たちが受けた救いから切り離して、この物語りを讀んではなりません。

第二に、v.29の「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」という言葉は、ただ金持ちのためにだけ語られたと考えてはならないということです。貧しく、悲惨な生活を送って来た異邦人は、モーセと預言者に耳を傾けなくても救われるなどと考えると、ルカはこの物語りを伝えたのではありませんでした。

私たちが神のこゝばを聞くとは、天上のキリストが聖伝と聖書を通して語られる“十字架の福音”(1コリ 1:18)に耳を傾けることです。一人一人の信者が、自ら福音に耳を傾けることなしには、“永遠の喜びを受け”(今朝の集会祈願)、“復活の栄光に与る”(今朝の拝領祈願)ことはあり得ないと知りましょう。

2. アモ

南王国の町テコアの牧者であったアモス(1:1)は、主に召されて北王国に出かけて預言しました(7:12-15)。現代の多くのキリスト者は、彼がサマリアの富める上流階級の人々に向かって、彼らの驕りを責めたということにだけ注目して、その預言の動機には共感を覚えることが殆どありません。その動機である「ヨセフの破滅に心を痛めることがない」(v.6)ということが、自分たちの信仰の中で実感をもって理解出来ないからです。神の終末的な裁きの到来を考えることが、すでに久しく現代の通俗的キリスト教理解の中から欠

落しているのです。

ニケア・コンスタンチノーブル信条の「主は、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます」という部分が、今日殆どの小教区のミサで唱えられる“洗礼式の信仰告白”からは抜け落ちていることに、だれも全く違和感を感じないような時代を、私たちは生きて来ているのです。

3. I テモ

vv.11-12 「神の人よ、…… 信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。」

使徒たちは、彼らの後継者である教父たちを育て、彼らに福音を委ねました。自らが永遠の命を得るために信仰の戦いを立派に戦い抜くのでなければ、どうして人々にキリストの福音を宣べ伝えることが出来るでしょうか。“使徒の後継者となる”とは、そういうことです。ですから使徒パウロは言いました。「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。……それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです。」(I コリ9:23-27)

「神は、定められた時にキリストを現してくださいませ」(v.15)という終末の裁きを脇に置いて、使徒たちが伝えたキリストの福音を理解するなどということは、不可能です。“だれも健全な教えを聞こうとしない時が来る”、“真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになる”という歴史の現実を十分に承知しつつ、使徒パウロはその後継者に語りました。「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ、厳かに命じます。御言葉を宣べ伝えなさい。折りが良くて悪くても励みなさい。」(II テモ 4:1-5)

今朝も主日のミサの朗読配分を用い、使徒たちの伝承を通して、私たちに福音を語ってくださる父・子・聖霊なる神に感謝しましょう。それは今やすべての信者に公開されており、私たちが信仰をもってこれに向かえば(II テモ 3:15)、だれでも自分で学ぶことが出来るのですから。

ハレルヤ、アーメン。